

佐賀県国際交流協会 30 周年記念インタビュー

スペースの関係上紙面でご紹介できなかった全文を、ご紹介します。



カルミナ ルイズ ムラカワ 氏

メキシコ出身

SPIRA 出前講座講師

Q1. 佐賀(日本)に来たきっかけを教えてください。

A.

大学生(19歳)のときに、仕事でメキシコに来ていた佐賀出身の主人と恋に落ち、わずか8か月で周囲の反対も乗り越えて結婚をしたことがきっかけです。

その後、最初の1年は主人の仕事の関係で東京で過ごしました。

寂しさもありましたが、自分で決めたことだから、自分も家族も後悔しないようにできることはなんでもしました。その頃のわたしは日本語がほとんどできませんでしたが、近所のご家族が、お茶や公園、買い物に誘ってくれ、言葉の壁を感じませんでした。その家の男の子に「お姉ちゃん」と言われたのが初めて覚えた日本語です。

Q2. 来たばかりの頃、佐賀の様子はどうでしたか？

A.

佐賀に着いて大自然の豊かさを目にした瞬間、ここなら暮らして行ける!と思いました。当時、外国人は全然おらず、教会のイタリア人神父さん以外は知りませんでした。

外出すると「ガイジン」や「鼻が高い」と言われ、辞書で調べると意味がわかった私はこう思いました「私から見れば、あなたたち全員外国人ですよ」。また、鼻の高さを意識したことがない自分に気づき、不思議な思いでした。

主人の実家でも、文化の違いをたくさん感じました。

メキシコのように朝食にステーキを主人に作った私に、義母から日本ではそうじゃないと言われてたり、昼食後にお昼寝をする習慣(シエスタ)に義母もとても驚いていました。

でも、最終的には義母もお昼寝をするようになったし、チーズやアボカドが好きになり、同様に、私も梅干しが好きになりました。

子どもが生まれ、外で子守唄を歌っていると、ご近所さんにたくさん見られたこともありました。

当時は誰に頼っていいか、誰に相談すればいいかわからず、主人がたくさん支えてくれました。教会に行き始めてからはシスターが日本人とつないでくれて、時々助けてもらいました。

Q3. 近年の佐賀はどうですか？

A.

最近は様々なことが便利になり、今来ている外国人はとても恵まれていると感じます。何か相談したいときも、当時の佐賀では手に入らなかった買いたいものも、簡単にアクセスできるようになりました。もう「ガイジン」とも言われないでしょう。

私は結婚して7年目、運転免許の取得にチャレンジしました。当時は今のような外国語のサポートもなかったため、周囲からは無理だと言われましたが、子育てしながら猛勉強しました。近所に住む警察官のご主人も熱心に教えてくれました。2回目の受験の合格発表で自分の番号が表示されたとき、本当に嬉しくてうさぎのように飛び跳ねて喜んだのを覚えています。

いろいろ大変な思いもしましたが、私は当時のことをマイナスには思っていません。過去の不便さがあったおかげで成長できたからこそ、今は困っている人をできるかぎり助けてあげたいと思います。

先日、困っている外国人のために通訳をしました。以前の自分を振り返り、人の役に立てるようになったことを嬉しく思います。

今の便利さは、これまでの外国人、SPIRA が頑張ってきた成果です。当たり前だとは思わないでほしいですね。

Q4. これからどんな佐賀になってほしいと思いますか？

A.

全ての国々の人たちに、物でのべんりさも大切ですが、心の広さや受け入れる心をもってほしいです。この小さい佐賀だからこそできると思います。

「何人だから〇〇」、「〇〇人らしくない」と決めつけないでください。日本人でもお刺身を食べられないひとがいるのと同じです。ひとり一人を尊重し、お互いの良い部分をミックスして、自分らしく生きていくことから素晴らしいことが生まれると思います。

海外のどんな人達も日本に来やすい仕組みを作っていただくことが、国際交流の始まりではないでしょうか。心の広さ、豊かさがあれば、佐賀県が本当の意味で住みやすい県になると思います。